

謎の蝶類学者 仁禮景雄

保科 英人¹⁾

はじめに

『白水隆アルバム』(2007年)に日本の蝶類学者約200名の略歴が掲載されている。彼らには富裕な家の生まれは決して少なくないようだが、戦前の特権階級の華族家出身となると一気に数が減る。また、鷹司信輔や黒田長禮、蜂須賀正氏といった公侯爵の華族学者を多く輩出した鳥類学界と比べると、同じ「ちょう」でも蝶類学界の華族は家柄でやや劣る。さらに、蝶類学者200名の中に名を連ねた田中芳男や高千穂宣麿は確かに男爵であるが、彼らを蝶類学者と呼ぶにはやや抵抗がある。そういった中、子爵家の生まれで、明治から大正時代にかけて活躍した仁禮景雄(にれ・かげお)は当時の蝶類学界ではトップクラスの出自を持ち、また蝶類学者と呼ぶに遜色ない研究業績がある。しかし、このような抜群の毛並みの良さにもかかわらず、『白水隆アルバム』に掲載された蝶類学者のうち、仁禮だけは顔写真が掲載されていない。フシギと言えばフシギである。以下、『白水隆アルバム』に記された仁禮の生涯を要約してみる(原文一部改編)。

「仁禮景雄(1885-1926)は、海軍大臣仁禮景範子爵の三男。海軍兵学校に入るも病気で中退。佐々木忠次郎、三宅恒方、内田清之助ら当時の代表的な昆虫学者から個人的指導を受ける。シロシジミやヤエヤマウラナミジャンメの命名者。また、ニレミスジに名を残す。少年時代の渡正監を指導。仁禮の死後、彼の標本は九州大学に寄贈された。仁禮が動物学雑誌に発表した日本産蝶類目録は日本の蝶の分類の基礎資料となった」

筆者が仁禮の生涯を調査するまでは、仁禮の略歴に関する知見はほぼ『白水隆アルバム』の上記の記述の範囲内に留まっていたと言ってよい。生没年以外の数字が全く出て来ないことから、華族でありながら仁禮の生涯は謎に包まれていたことがわかる。

筆者は約1年の調査期間をかけ仁禮の履歴の一部を明らかにすることができ、その成果を保科(2015)として発表した。しかし、その手法や記述は史学的なもの

で、虫屋の皆様には過度に詳細かつ難解な文章と自覚している。そこで、本稿では仁禮の履歴を確定するに至った過程は省略し、判明した仁禮の生涯の概要のみを述べることにした。本稿は言わば保科(2015)の要約であり、そこで用いた参考文献や判断根拠となった資料名は省略した。どうしてもそれらを知りたい物好きな方は保科(2015)を参照していただきたい。

なお、本文に入る前に重要な点を指摘しておきたい。本文中には九州大学昆虫学教室で保管されている仁禮景雄コレクション(写真1)の蝶類標本のラベル情報から、筆者が彼の動向を推測した箇所がある。しかし、仁禮コレクションの標本には、採集者、産地、採集年月日の3大要素が揃ったラベルがほとんど存在しない。よって、標本ラベルから推測で組み立てた仁禮の略歴は危ういものがあり、将来他の確実な資料が発見されればあつという間にひっくり返される可能性があることをお含みおきいただきたい。

これまでに判明した仁禮の生涯

仁禮景雄は明治18年10月10日に生まれた。父は景範。良く知られているように、仁禮景範は薩摩藩出身の海軍中将で、参謀本部海軍部長、横須賀鎮守府長官、海軍大臣などを歴任した明治海軍建設の功労者である。その功でもって明治17年に子爵の爵位を授けられた。ただ、従来、景雄は景範の三男とされていたが、巖



写真1 仁禮景雄コレクション(九州大学農学部昆虫学教室所蔵)。

¹⁾ Hideto HOSHINA 福井大学教育地域科学部

密には末っ子の四男である。三男の景明は早世している。景雄は有力海軍軍人を父に持ったおかげで、その後の人生において随分得をした。

もっとも、景雄が「得をした」とはお金持ちの家に生まれて高価な蝶類標本をいくらでも買って貰えた、との意ではない。なぜなら実家の仁禮家は船橋の塩田経営、ついで北海道十勝の農場経営に失敗したからである。もちろん、景雄がカネに困ると言っても庶民のそれとはまた別次元の話ではあるが、彼を大金持ちのボンボンとみなすのは必ずしも妥当ではない。

明治25年2月、景雄の姉の春子は斉藤実海軍大尉(のち大将、朝鮮総督や首相を歴任)に嫁いだ。従来、仁禮景雄を語る際に義兄斉藤実の存在はほとんど言及されてこなかった。しかし、実父に加え義兄が有力海軍軍人だったことも、仁禮の人生に大きく有利に働いた。

明治33年11月、15歳になったばかりの景雄は父景範を失った。翌々明治35年2月10日、仁禮は滞在先の千葉県一ツ松村(現在長生郡)から東京の姉春子宛てに送った手紙の中で「異なる土地に来ればひと冬に二度と見るかな初雪をば」との歌を詠んだ。お世辞にも巧いとは言えまい。だいたい、仁禮本人が書簡中で自らの短歌に対し「一字足りません」「なんだか変んですね」(原文ママ)と自認している。

下手糞な歌を作って2年半後の明治37年11月18日、景雄は海軍兵学校に入校した。入学時の成績は183人中135位なので、特別成績優秀だったとは言い難いだろう。

仁禮景雄が海軍兵学校へ入校する約半年前の5月15日、海軍少佐の長兄の景一が日露戦役・旅順港閉塞作戦で戦死した。次兄の景助が仁禮子爵家を継いだ。景助は宮城農学校を経て農業畑を歩んでいた。海軍軍人ではない。つまり、長兄の突然の死により海軍中將としての故父景範の後継者の責任が急に景雄に降ってきた形である。景雄の心情は本人のみぞ知るところであるが、本来なら御気楽四男坊で過ごせばいいのに、突然押し掛かってきたプレッシャーは大きかったものと推測される。

さて、海軍兵学校に入校した仁禮であるが、残念ながら健康に恵まれなかった。病気による休学期間を挟んだのち、明治40年3月16日付で海軍兵学校を退校した。

兵学校退校後の仁禮の動向はつかめないが、実家の仁禮家に戻って静養していたと思われる。やがて、仁禮の体調は回復したらしく、明治42年の7月下旬から9月中旬まで北海道十勝国河東郡音更村に滞在した。仁禮が音更村を滞在先に選んだのは、「十勝にはチョウがたくさん生息していそうだから」との類の生物学的理由ではない。実は、音更村には仁禮家の農場があり、宮城農学校で学んだ次兄の景助がこの農場経営にあっていた。明治末当時の農場経営は順調で、景雄は次兄のところに

約2ヶ月間身を寄せていたはずである。

仁禮コレクションの標本調査から、仁禮景雄は7月末から8月23日まで音更村をフィールドとして、コムラサキ、ウラギンスジヒョウモン、ウラジャノメ、ジャノメチョウなどを採集したことがわかった。そして、仁禮は8月26日には釧路でジャノメチョウ、同月27日には浦幌でオオウラギンスジヒョウモンとウラギンスジヒョウモン、そして同月30日に音更村でサカハチチョウを捕っていることから、彼は明治42年8月下旬に釧路方面へ約数日～一週間の旅行をしたと考えられる(図1)。明治38年10月には音更村のすぐ南に位置する帯広と釧路を結ぶ鉄道釧路線が開通しており、仁禮は鉄道の旅を楽しんだはずである。

明治42年夏の仁禮の北海道におけるアカマダラの野外調査の論文が同年の冬の「動物学雑誌」に掲載された。これが彼の処女論文である。

明治43年3月11日、仁禮は雑誌『海軍』通信記者として7か月間の南米経由・英国渡航願が認許され、3月15日に日本を出航した。仁禮が『海軍』記者として採用された経緯は判然としないが、海軍兵学校に在籍経験があり語学ができることに加え、亡き父と義兄斉藤実が有力海軍軍人であったことが有利に働いたことは間違いあるまい。仁禮の記者としての仕事は巡洋艦生駒に乗り込み、その航海の取材記事を書くことになった。軍艦生駒は西回り航路を採り、シンガポール、インド洋モーリシャス島、アフリカ喜望峰を経てアルゼンチン共和国独立百年祭に参列、後に英国へ向かい日英博覧会に列席することになっていた。

雑誌『海軍』に載った一連の航海記事は、仁禮が後世に残した蝶類学の論文以外の文章としては例外的存在のはずだ。もっとも、これらの航海記事には蝶類学者ならではの視点は何もなく、筆者の率直な感想としては面白くもなんともないものである。

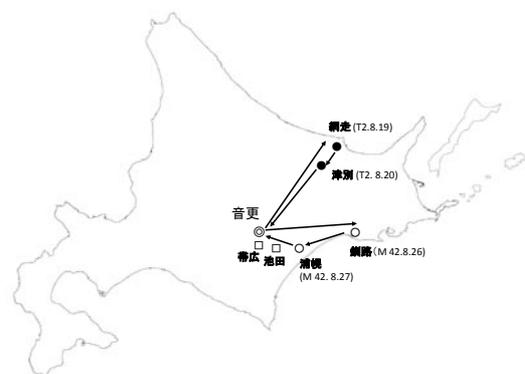


図1 仁禮景雄の北海道での蝶類調査の足跡(推定)
M:明治, T:大正。○と●は明治42年と大正2年夏にそれぞれ仁禮が訪れたと思われる地名。□は本文中に出てきた地名。

仁禮が乗った生駒がアルゼンチンに到着したのは明治43年5月15日。そして、首都ブエノスアイレスに着いたのが同月19日である。仁禮が義兄齊藤実に書き送った書簡からは、彼がアルゼンチン滞在中で聞きしたことが、苦労したことの両方が窺える興味深いものである。それによると、仁禮がアルゼンチン滞在中に悩まされたのは第一に言語だった。日本海軍は英国海軍を模範としていたので、仁禮は海軍兵学校時代に英語を叩きこまれていた。しかし、アルゼンチンでは得意の英語が殆ど通じず、仁禮はやむなくスペイン語会話の参考書を購入した。もっとも、当たり前だが一朝一夕でスペイン語をマスターできるはずもなく、不便さは容易に解消しなかったようだ。次に困ったのは物価の高さである。仁禮は同じく生駒乗船組でブエノスアイレスに来ていた下斗米秀三東北帝国大学助教授と津久井利行衆議院書記官との3人でホテルの一室を借りることで金を節約した。下斗米はのちに物理学者の田中館愛橘の養子になったので、田中館秀三の名前の方が通っているだろう。

ブエノスアイレスでは仁禮は動物園で遊んだ。彼は「其の広大なる事到底上野動物園などの遠く及ばざる所」との感想を抱いている。

軍艦生駒がアルゼンチンを出航したのは6月5日である。その後、生駒はブラジル・リオデジャネイロを経由して大西洋を横断した。イギリス到着後、仁禮や下斗米秀三、津久井利行、志賀重昂ら13名は7月12日、グレートブリテン島コーンワル半島のファルマスで下船した。うち仁禮と志賀の2人は生駒を下りる際に、イタリアで生駒に乗船して帰国する希望を艦長に申し出ている。志賀は英国からフランス、ポーランド、ドイツ、スウェーデン、ベルギー等を経由してイタリアに達した。仁禮と志賀の2人がナポリで軍艦生駒と合流した日の特定はできないが、8月後半～末あたりと考えられる。なお、虫屋の世界では志賀重昂と言っても多くの方はピンと来ないだろうが、豪傑肌の地理学者として地理学の分野ではよく知られている人物である。代議士経験もある大物だ。

さて、仁禮と志賀は同じ港で降りて同じ港で生駒に再乗船したのだから、彼らは全部ないしは一部の行程を共にしていた可能性がある。しかし、志賀が残した大航海記録に仁禮は登場せず、残念ながら仁禮の英国での下船後のイタリアまでの足取りはおろか、志賀と少しでも一緒に行動したのかすら判然としない。

イタリア出航後、生駒は9月エジプトに寄港した。仁禮は艦長やその他海軍将校らとピラミッドを見学している。仁禮が日本に帰国したのは出発から約7か月後の明治43年10月29日である。

筆者が九大に保管されている仁禮景雄コレクションを調べた最大の動機は蝶類標本のデータラベルから南米とヨーロッパにおける明治43年の仁禮の足跡を辿る

ことにあったが、これらの地域の地名ラベルを持つ蝶類標本は存在しなかった。7月上旬にイギリスで生駒下船後、8月末にナポリで乗船するまで、蝶を捕る機会ぐらいいくらでもあったように思える。しかし、現在の仁禮コレクションに該当標本が残されていない以上、仁禮は欧州で網を振るわなかったのだろうとしか言いようがない。現在過去の大半の虫屋とは異なり、仁禮はコレクター気質をいささか欠く昆虫学者だったのではなからうか。

明治43年10月末の帰国後の仁禮景雄の動向ははっきりとは掴めない。仁禮景雄コレクションには「Tokyo」「Meguro」(=目黒)との地名表記で、明治44年4月から8月までの様々な日付ラベルを持つ東京産蝶類標本が並んでいる(ラベルに採集者は記されず)。これらはモンシロチョウ、コムスジ、ヒカゲチョウ、サトキマダラヒカゲ、コジャノメ、ヒメウラナミジャノメと言った都市近郊でも見られる普通種ばかりだ。憶測の域を出ないが、これら普通種の標本は他人から譲渡されたものではなく、住まいのある東京で仁禮自身が捕ったものではなからうか。虫屋の感覚で言えば、モンシロチョウの標本を人から貰うなんぞはプライドが許さないはずである。前年の海外旅行中は採集ができず、さすがに蝶が恋しくなったのか。

時は明治から大正へ。少なくとも大正元年頃、仁禮景雄は芝区高輪南町(現在のJR品川駅付近)の次兄の景助宅に住んでいた。この頃は北海道音更村の景助の仁禮家農場はまだ経営破たんしていなかった。したがって、景雄は北海道滞在中の景助の東京の自宅を管理していたとも考えられる。

大正2年夏、仁禮景雄は音更村の農場に滞在した形跡が蝶類標本から見出せる。この年仁禮は遅くとも8月3日には音更村に到着し、13日まで同地で蝶を採集、スジグロシロチョウやフタスジチョウ、オオヒカゲなどを捕った。また、盆明けから数日間ほど網走方面へ遠征した(図1)。仁禮は同月19日、網走でエルタテハ、クロヒカゲ、ヒメキマダラヒカゲ、ヒオドシチョウ、翌20日には津別でエルタテハとスジグロシロチョウを捕っている。

仁禮が網走に出向いた前年の大正元年10月、帯広の東に位置する池田と網走を結ぶ鉄道網走線が完成していた。北海道の鉄道の路線拡充に伴って、仁禮もまた行動範囲を広げられたものと考えられる。

大正3年、4年の仁禮景雄の動向はさっぱりわからない。つぎに、大正5年10月、仁禮は前掲の日本産蝶類目録の一本目を『動物学雑誌』に発表した。大正8年まで長期に渡って分割掲載された一大目録である。

仁禮は大正6年1月15日分家願が認許され、同月30日除籍となった。ようするに仁禮子爵家から分家して華族ではなくなったと言うことである。分家してから

約4か月後の大正6年5月19日、仁禮は東京帝国大学第二学生集会所で開催された東京昆虫学会例会に出席した。以上、欧州より帰国後の明治43年からこの大正中頃までの仁禮の足取りはここで述べた程度のことしか判明していない。

大正中頃の仁禮の経歴を示すもう一つの史料がある。それは仁禮が川崎造船所の社員だったと言うものだ。実は、大正7年7月付のある文書中に「株式会社川崎造船所東京出張所仁禮景雄」との名刺が残っている。もちろん、同姓同名の別人の可能性もあるが、以下の理由から名刺の持ち主が蝶類学者・仁禮景雄である確率が高いと思われる。

大正7年当時の川崎造船所社長は松方幸次郎で、薩摩出身の松方正義元老の三男である。また、業種上、川崎造船所が海軍と関係が深いのは当然であるが、明治～大正前半の日本海軍は「薩摩海軍」と呼ばれるほど、薩摩藩出身者が突出して要職を占めていた。景雄の父の仁禮景範もまた薩摩海軍閥の主要軍人の一人である。大正元年に海軍大将になっていた義兄斉藤実は岩手県出身であるが、景範の娘を妻にしている関係上、薩摩閥に繋がっている。つまり、景雄が川崎造船所に縁故入社できる環境はあまりにも整いすぎているわけだ。

筆者は保科(2015)で台湾を地盤としていた財閥の鈴木商店と川崎造船所の関係に着目した。ようするに鈴木商店の支援があって、仁禮は初めて台湾の蝶類の研究に取り組むことができたのではないかと勘ぐりだ。筆者の憶測に興味のある方は拙文を参照していただきたい。

大正9年5月31日、仁禮は戦艦陸奥の進水式を見物した。彼は当日の様子を朝鮮総督として赴任中だった義兄斉藤実に書き送っている。

さて、仁禮が大正9年6月12付で朝鮮総督府宛斉藤実に送った書簡によれば、仁禮の住所は「東京市四谷区仲町三丁目四十四番地」となっている。実はこれ、斉藤実が明治44年10月に建てた邸宅の住所である。斎藤夫妻が朝鮮へ赴任中、義弟の景雄は留守番をしていた。もちろん、留守番と言うと聞こえが良いが、ようは居候である。また、仁禮の住所が「四谷仲三ノ二五」と記されている文書もある。こちらの方は斉藤実邸とごく近所ではあるが、斉藤家そのものではない。となると、仁禮は斉藤邸の近所に住んで主留守中の斉藤家の家屋の管理をしていたとも考えられる。いずれにせよ、期間不明ながら、景雄が斎藤実宅に厄介になっていた時期があるのは確実だ。それにしても、大正初め頃景雄は次兄景助の家に住んでおり、また大正中頃は義兄に世話になっていたわけで、自立していたとは言い難い生涯ではあっただろう。もっとも、仁禮は大正8年2月にインフルエンザを罹患して以降、数年にわたって病床にあったので、斉藤家の“居候”と呼ぶのは本人にとって酷かもしれない。

白水(1985)によると、仁禮景雄の最後の論文は大正10年である。以降亡くなる大正15年まで仁禮がどこで何をしていたか、これまた全く不明だ。この大正10年が仁禮の論文の打ち止めとなったのは健康上の理由と考えられないこともない。仁禮コレクションの蝶類標本の採集年月日もまた上記の事を暗示する。仁禮が海軍兵学校を退学した明治40年以前に捕られた標本がないのは当然としても、大正9年以降採集の標本が殆ど残されていないのである。西暦に直せば、1909年の第一回目の仁禮家北海道農場訪問時を除くと、仁禮コレクションの蝶類標本は殆どが1910年代に採集されたものである。仁禮は大正10年(1921年)に最後の論文を発表したのとほぼ同時に標本の収集も止めてしまったのである。彼の健康が研究の続行を許さなかったからなのか、はたまた気が尽きたからなのか。多々憶測はできるものの管見の限りではそれらを裏付けできる史料がない。

仁禮景雄は大正15年8月9日午後1時半に41歳で死去した。限定的ではあるが、とりあえず本稿にて明らかにできた仁禮の略歴をまとめたのが表1である。

引用文献

- 保科英人, 2015. 蝶類学者仁禮景雄先生小傳. 日本海地域の自然と環境, (22): 111-131.
 白水隆編, 1985. 日本産蝶類文献目録. 北隆館. 873 pp.
 白水隆文庫刊行会編, 2007. 物故・日本の蝶研究者, 肖像写真と略歴. p. 311-330. 白水隆アルバム. 白水隆文庫刊行会. 368 pp.

表1 仁禮景雄の履歴

和暦	西暦	年齢	事項
明治 18 年	1885 年	0 歳	10 月 10 日, 海軍中將仁禮景範の四男として生まれる
明治 25 年	1892 年	6 歳	姉・春子が齊藤実(のち首相)に嫁ぐ
明治 33 年	1900 年	14 歳	11 月, 父景範死去
明治 35 年	1902 年	16 歳	姉・春子宛の書簡の中で上手とは言い難い歌を詠む
明治 37 年	1904 年	18 歳	5 月, 長兄の景一戦死. 11 月, 海軍兵学校に入校する
明治 40 年	1907 年	21 歳	1 月, 転地療養延期願が受理される. 3 月, 海軍兵学校を退校する
明治 42 年	1909 年	23 歳	7 月から9 月まで, 仁禮家の農場があった北海道十勝音更村に滞在する
(同年)			北海道滞在中, 釧路方面へ旅行をする. 冬, 初めての論文を発表する
明治 43 年	1910 年	24 歳	3 月, 雑誌『海軍』記者として軍艦生駒に乗り組み日本を出航
(同年)			5 月, アルゼンチン着. 7 月, 英国に到着し生駒を下船
(同年)			9 月, イタリアで生駒に乗船し, エジプト観光ののち, 10 月に帰国
明治 44 年	1911 年	25 歳	東京で頻繁に蝶の採集をした形跡あり
大正元年	1912 年	26 歳	この頃, 芝区高輪南町の次兄宅に住む
大正2年	1913 年	27 歳	8 月, 仁禮家の音更村の農場に滞在する. 網走でも蝶を採集する
大正5年	1916 年	30 歳	『動物学雑誌』に日本産蝶類目録の連載開始(大正8年まで)
大正6年	1917 年	31 歳	1 月, 分家し華族の籍を脱する. 5 月, 東京昆虫学会の例会に出席する
(大正7年)	1918 年	33 歳	(大正7年の文書に「川崎造船所東京出張所 仁禮景雄」との名刺)
			(ただし, 同姓同名の別人の可能性もあり)
大正8年	1919 年	34 歳	2 月, インフルエンザを患う. 8 月, 義兄齊藤実は朝鮮総督となる
大正9年	1920 年	35 歳	少なくともこの頃は齊藤実の邸宅に居候. 5 月, 戦艦陸奥の進水式に参列
(同年)			6 月, 平壤の蝶類標本の送付を齊藤実に依頼
(同年)			少なくともこの年, 東京電機工業(株)の監査を務める
大正 10 年	1921 年	36 歳	春の時点では, 一昨年のインフルエンザ罹病以降の体調不良が回復せず
(同年)			『昆虫世界』に生涯最後の論文を発表する
大正 15 年	1926 年	41 歳	8 月9 日午後1 時半死去する(41 歳)

※年齢は, その年の元旦時における満年齢.